

このコラムは、日本語の仕組みや使い方などを考えるコーナーです。
どうぞ、コーヒータイムのときにも、お読み下さい。

ことばのコラム ひとくちメモ (293)

増える音韻

夕食後、タモツ君のおじいさんがおばあさんと話しています。

「国語史の講義で、万葉集の時代には、長音^{ようおん}も拗音もなかったって聞いてびっくりしたものだけど、日本語の音韻って、どんどん増えたんだね。」

「漢語の導入で、キャキュキョとかクウクィクェクォとかの拗音が使われるようになったのでしたっけ。」

「そう。合拗音^{ごう}のクウクィクェクォは、共通語では直音化したけれど、キャキュキョとかシャシュショ^{かい}とかの開拗音は、完全に日本語の音韻になっているね。」

「長音は、中世になってからでしたっけ。」

「そう。アウ・オウがオー、イウがユー、ウウがウー、エウがヨーになった。」

「蝶^{ちょう}がテウになり、チョーに、銀杏^{いちよう}がイテウになり、イチョーになったのでしたね。」

